

悠久の時を経て、受け継がれる信仰

神剣を祀る社

# 熱田神宮

昨年、創祀1900年を迎えた熱田神宮。神剣・草薙神剣を御霊代として祀り、古くから「熱田さん」と親しまれながら、あつく崇敬されている。歴代の皇族や将軍をはじめ、多くの先人が祈りをこめて進んだ参道を、いま歩く。

## 三種の神器のひとつ 草薙神剣を祀る神社

「此の剣は昔素盞鳴尊の許に在り。今は尾張國に在り。」

「日本書紀」の一節である。酒に酔った八岐大蛇を素盞鳴尊が退治した時、尾から一振りの剣が出てきた。その剣の名は草薙神剣。八咫鏡、八咫瓊勾玉とともに、三種の神器の一つである。

その後、草薙神剣は素盞鳴尊の姉である天照大神に献上され、瓊々杵尊が地上に降臨される際に鏡、勾玉とともに授けられる。しばし皇居で祀られたのち、東征に向かう日本武尊に託された。

東征時、日本武尊は尾張國に立ち寄る。國造であった乎止與命の館で征伐について議論した。征伐

後も、國造の館に留まり、乎止與命の娘の宮簀媛命を妃とし、尾張國で幸せに過ごされたという。その後、滋賀県の伊吹山で威を振る

う賊を討伐する命を受け、日本武尊は宮簀媛命に草薙神剣を預け、尾張國を離れる。しかし、伊吹山中で病に倒れ、都に帰る途中、伊勢國能褒野（現在の三重県亀山市）で命を落とされた。宮簀媛命は託された剣を尾張氏一族の斎場で

あった熱田に祀る。これが熱田神宮の創まりであり、熱田神宮の主祭神、熱田大神とは草薙神剣を御

霊代として寄せられる天照大神のことである。

## 太古から変わらぬ思い 次代へとつなぐ信仰

熱田神宮は、飛び地も含めると、約30万㎡の境内であり、本宮のほかに、1別宮、12摂社、31末社にそれぞれ神々が祀られている。名古屋市内とは思えないほど豊かな自然に囲まれ、なかには樹齢千年前後とされる大楠も残る。大部分が海だった名古屋南部の中で、この地はもとも陸地だった。北方の名古屋城から標高15〜8mほどで広がっている熱田台地の南端であり、弥生時代の官廷式土器が出土した高蔵遺跡のほか、熱田神宮の境内にも遺跡が現存している。

三方が海に囲まれた岬の上に鎮座していることから、熱田神宮が中国の伝承にある「蓬莱島」であると鎌倉時代後期の書物「溪嵐拾葉集」に記されている。熱田神宮宝物館には、亀と鶴、松という蓬萊文様が描かれた鏡や時絵箱が残っている。また、熱田大神が楊貴妃となったという言い伝えもある。

ほかに、熱田神宮には皇室や幕府、戦国武将、尾張藩主、小野道風をはじめとした著名人の手に

よるものなど、約6千点が収蔵されている。うち28点は国宝や重要文化財に指定。毎月内容を換えながら、宝物館で展示されており、4月は山蜘蛛から主人を守るため、自ら鞘から躍り出て防いだ

という逸話が残る銘刀「脇差 銘 吉光/亀王丸(蜘蛛切丸)を始め、多くの刀剣や美術品が並ぶ。「これらの品々は、すべて熱田に住まう神々への思いの結晶です」と神宮関係者が話す通り、収蔵品には一つひとつ、神々へお供えをした人々の真心が込められている。それは、熱田神宮に関わる事柄を表現した書や絵画、繊細な意匠が施された刀を見ても伝わってくる。

現在、熱田神宮には年間650万人が参拝している。今も昔も変わらず、多くの人々が熱田大神にあつい祈りを捧げている。昨年、創祀1900年を迎えた参道を歩くと、「歴史と伝統を次代につなぐ」と書かれた横断幕が目に入る。いま、私たちが参拝するように、次世代の子どもたちも同じ参道を歩くのだろう。変わりゆく名古屋の街で、熱田神宮は、そのあり方を変えず、静かに時を刻み続ける。



熱田神宮の本宮。もとは尾張造といわれる建築方式だったが、1893年に伊勢の神宮とほぼ同様の神明造に建て直された



織田信長は今川義元との戦の前に、熱田神宮で必勝を祈願した。「信長堀」は、桶狭間の戦いに勝利した信長が奉納したもの



「尾張名所図会」や「名古屋甚句」でも登場する二十五丁橋。板石が25枚並んでいることから名づけられ、名古屋で最古の石橋といわれる



1)「官幣大社熱田神宮真景図」小田切春江が描いた尾張造の熱田神宮(熱田神宮提供) 2)重要文化財「入帷残闕」。入帷は衣服などを収納しておく時、上にかけて覆ったり、包んだりした布(熱田神宮提供) 3)「脇差 銘 吉光/亀王丸(蜘蛛切丸)」。源家重代の宝刀とも、織田信長が収めたものともいわれる(熱田神宮提供) 4)樹齢千年前後の大楠



第三鳥居。今も昔も、熱田大神への祈りを込めてくぐる